23
2025.9.24 発行
社内報 夏絆 ーなつなー

ベテランが語る 夏原の変わらぬ魅力

長年、会社の変遷を見つめてきたお二人の目には、今の夏原はどのように映っているのでしょうか。
ベテランの視点から、会社の魅力と未来への期待を伺いました。

京都高建株式会社
代表取締役社長
髙橋（たかはし） 正（ただし）さん

私が思う夏原の魅力

▶ 変わらぬ強みと、時代に応える柔軟性

私が現場の第一線にいた頃は、皆が「夏原を大きくするんだ」という1つの目標に向かって走っていた時代でした。その頃から受け継がれる「職人のまとまりと高い技術力」は、今も変わることのない夏原の強みと言えるでしょう。それに加え、今の崇介社長は昔ながらのやり方に固執せず、常に新しいことを取り入れ、時代に合ったやり方を模索しています。その柔軟な姿勢こそが今の夏原の新たな魅力であり、これからの時代を生き抜く大きな力になっていくと感じています。

これからの夏原に期待すること

▶ 事業の拡大から、人を守り育てるフェーズへ

夏原はスーパーゼネコンと渡り合えるほど、大きな会社へと成長しました。長い付き合いだからこそ、軽率な物言いはできません。その上で、会社は今、事業の拡大から「人を守り、育てる」という、次の段階に来ているように感じます。その舵取りを崇介社長がどのように担っていくのか、見守りたいと思います。

さらなる成長に向けた今後の挑戦

▶ 技術よりも「気持ち」を重視し、同じ方向を向ける仲間を育てる

会社を存続させ、次代へつなぐための挑戦。それは「良い職人さんを育てること」に尽きるでしょう。単に腕が良いだけではなく、会社と同じ方向を向き、「夏原のために」という想いを共有できる職人さんが不可欠です。私がここまで熱量を持ってこられたのも、出会った当時に困っていた崇介社長を「俺が守る」と心に決めたから。自分のためではなく、誰かを守りたいという一心でした。もちろん、誰もが同じ熱量を持つのは難しいかもしれません。しかし、相手を思いやる気持ちは、きっと育てられるはず。そのためには、現場で汗を流す職人さん一人ひとりの気持ちを会社側が汲み取ることも、重要になってくると考えます。

夏原の皆さんへ

一人ひとりが持つ高い技術力と、仲間を思う温かい気持ち。それらの強みを活かし、これからも夏原をさらに盛り上げていってくれることを願っています。共に頑張りましょう。

夏原のベテラン職人さん
山田（やまだ） 良一（りょういち）さん

私が思う夏原の魅力

▶ 職人の笑顔を第一に考える、面倒見の良さ

元気な良い職人さんばかりが集まっていると感じます。皆真面目で、朝晩の笑顔の挨拶も欠かさない。なぜそうした人たちが集まるのか。やはり先代から今に至るまで、夏原社長の面倒見が良いからでしょう。職人さんの定着率が何よりの証拠です。

▶ 顔を合わせる機会が、良い環境をつくる

年に数回ある安全対策会議も、働きやすい環境づくりにつながっています。社員皆が顔を合わせる場で一番に取り上げるのは、カッターナイフや機械の扱いに関する注意喚起。会社が社員の安全を気づかってくれている、と肌で感じられる機会です。

これからの夏原に期待すること

▶ 現状への感謝と変わらぬ期待

今以上に望むことはありません。これまで通り仕事をいただければ、職人さんたちはついていくはずです。会社に守られていると感じるからこそ、今後もできる限りの貢献をしていきたいと思っています。

さらなる成長に向けた今後の挑戦

▶ 円滑な現場運営に向けた「番頭」の増員

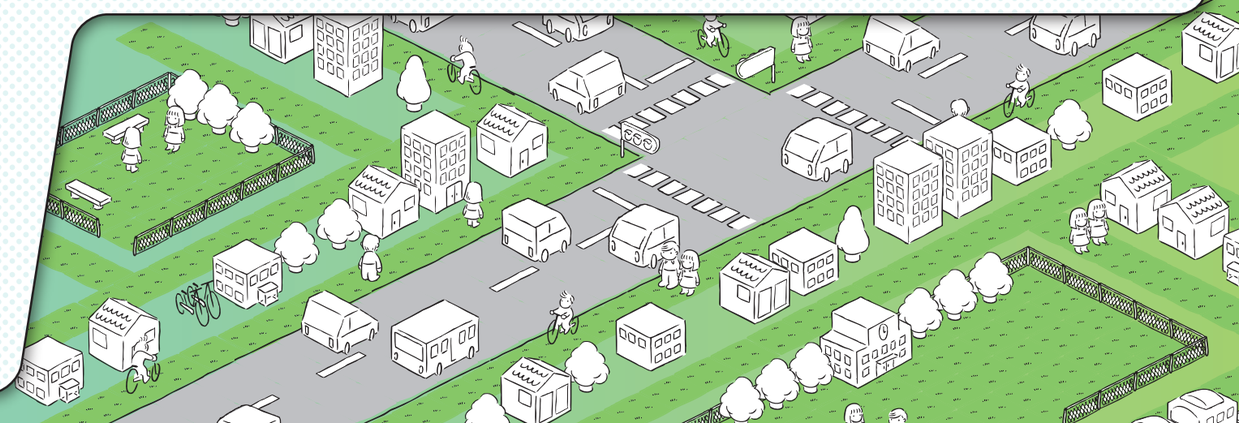
現場をまとめる「番頭さん」が一人でも二人でも増えれば、と思うことがあります。人材育成は大変難しい。しかし、番頭さんが増えれば、大きな現場もよりスムーズに進むはずです！

▶ 人を育てる上で、最も大切なこと

38年間この会社にいますが、人を育てる上で大切にしているのは、まず「怪我をしないで頑張ること」。そして「材料を無駄にしないこと」です。物価が高い昨今、ボードの切れ端でも綺麗に保管しておけば、必ず出番が回ってきます。日本語に不慣れな外国籍の社員にも、基本的な挨拶や道具の大切さを伝え続けることで、彼らの成長につながると考えています。

夏原の皆さんへ

皆が今まで通り真面目に仕事をしていれば、会社はもっと大きくなっていくでしょう。酷暑が続きます。とにかく怪我をしないように、安全に気をつけて頑張ってほしいと思います。



夏原の施工事例紹介vol.13

弥栄会館計画

京都の歴史的建造物「弥栄会館」の再生プロジェクトは、たび重なる変更と長期化する工期を乗り越え、ついに完遂へ。夏原社長と、長く現場を支え続けた職人たちの熱い思いを追いました。

現場名：（仮称）弥栄会館計画
工期：2023年３月～ 継続中
人工：3000名

なつはら そうすけ
夏原 崇介社長

受注の経緯

信頼が導いた、新たな挑戦

以前、滋賀県の現場でお世話になった松本所長という、非常に人柄の良い方がいらっしゃいました。その現場でうまく仕事をやり遂げたことで高く評価していただいたことから、松本所長が異動された次の現場、京都の「弥栄会館計画」でも声をかけていただきました。弥栄会館が帝国ホテル京都へと生まれ変わる一大プロジェクト。**もともとあった建物の文化的価値を尊重しつつ解体と新築を組み合わせていく、非常に難しい現場**でした。

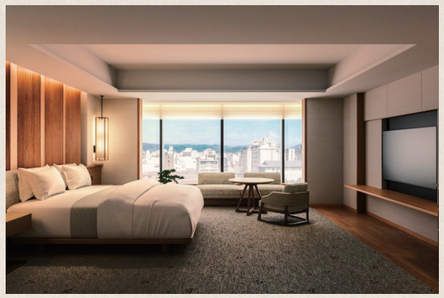
印象に残っている出来事

たび重なる作り直しを乗り越えた「職人魂」

この現場はデザイナーさんのこだわりが非常に強く、仕様がなかなか決まらない中で工事が進行。当初は2025年7月には完成する予定でしたが、**何度も作り直しが指示されるなどし、引き渡しが延期**。しかし、誰もが関わりたいと願う歴史的プロジェクトのため、職人の皆さんは根気強く対応してくれました。

相手を思い、信頼関係を築く

松本所長とは、現場以外でもお酒を飲んだり、ゴルフに行ったりして仲を深めました。私が常に考えているのは、**「どうすれば相手に喜んでもらえるか」**ということ。遊びの場では楽しく過ごすことを意識し、そこから生まれる信頼関係を大切にしています。



職人の皆さんへメッセージ

職人の皆さんが、この長く困難な現場に根気強く最後まで向き合ってくれたことに、心から感謝しています。特に職長の村岸さん、そして職長をサポートしてくれた中村さん、お二人のタッグがなければこの現場を乗り越えることはできなかったでしょう。

松本所長へメッセージ

松本所長とは2つの現場でお世話になりました。今回が定年を迎える最後の現場だったと伺っています。「この人のために頑張ろう」と周りに思わせる、人を惹きつける魅力を持った方です。「出会えて本当に良かった」と心から感謝しています。

＼下地職長を務めました！／

むらぎし ともひさ
村岸 智久さん

下地職長として注意したポイント

誠意を込めた「ごめんなさい」と「お願いします」

帝国ホテルの弥栄会館の現場は、2024年3月頃から開始しましたが、今もなお作業が進行中。これほどまでに工期が長期化しているのは、発注元からの細かい納まり指定により、修正が多発しているため。壁や天井を組み上げ、ボードを貼ったあとにそれを剥がし、下地からやり直すこともありました。こうした、たび重なる変更は、職人さんたちの士気を低下させかねません。職長として「ごめんなさい」と謝りながら、何度も「お願いします」と頭を下げ、作業を進めていただきました。

印象に残っている出来事

変更の連続にも一丸となって奮闘

この現場で一番印象に残るのは、やはり「解体」や「貼り替え」の多さです。正直なところ、理不尽に感じることもありました。それでも、ボードと下地の6人のメンバーを中心に、現場に入った**延べ15名の職人たちが一丸となって作業を進めてくれました。**しかし、予想を超える工事の長期化により、早くも2度目の夏が到来することに。空調服や扇風機で暑さ対策をしながら、完遂を目指して奮闘しています！

職人の皆さんへメッセージ

長期にわたる工期の中、何度もやり直しに尽力してくださり、ありがとうございます。皆さんが忍耐強く作業を継続してくれたおかげで、ようやくゴールの兆しが見えています。引き続き、熱中症には十分気をつけつつ、最後まで力を合わせて頑張りましょう。

＼ボード職長を務めました！／

なかむら しげはる
中村 重治さん

ボード職長として注意したポイント

あとの工程を見据えた、細部へのこだわり

当社の後に多くの業者が入るため、あとから指摘が出ないよう特に気を配りました。チリのような、仕上げで少ししか見えない部分はごまかしが効きません。だからこそ、より丁寧な仕事が求められます。図面が未定で資材も届かない状況でも、事前に図面を読み込み、**仲間としっかり準備して品質を維持**することに徹しました。

印象に残っている出来事

たび重なる変更にも誠実に対応

とにかく変更が多く苦労しました。一度きれいに仕上げたものでも、変更指示があれば壊しに行かなければなりません。職人さんに「またやり直しを」と伝えに行くのは、本当に心苦しいものでした。しかし、皆さん「またですか」と言いながらも、**状況を理解して文句一つ言わずに対応してくれました。**その協力がなければ、乗り越えることはできなかったでしょう。

職人の皆さんへメッセージ

職人たちには本当に感謝しかありません。なかなか休みが取れないほど厳しい状況でしたが、それでも皆さん「やります」と言ってくれました。その気持ちが本当にありがたく、励みになります。チーム一丸となって、最後までやり遂げたことを誇りに思います。